

〈今月の紙面〉

- ・「食料・農業 知っておきたい話」 -16- (2面)
- ・政府が水田政策転換決定 (3面)
- ・上半期の牛肉需給動向 (4面)
- ・メロン 整枝と誘引作業を省力・軽労化 (5面)
- ・排水処理 省スペース・低コスト化 (6面)
- ・12年度畜産物生産費 (7面)
- ・畜産物需給見通し (8面)

開拓情報

発行所
 公益社団法人全国開拓振興協会
 〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13
 TEL 03-3586-5843
 FAX 03-3586-5846
 ホームページ http://www.kaitakusya.or.jp
 全日本開拓者連盟・全開連・全国開拓振興協会共同編集

TPP国民集会に3500人結集

国会決議守り「聖域」確保を

全国農協中央会など生産者団体や生協などの消費者団体で組織する「TPPから『食と暮らし』の『のち』を守り『国会決議の実現』を求める実行委員会」は12月3日、東京・日比谷野外音楽堂で、「TPP決議の実現を求める国民集会」を開催した。全国から農林漁業関係者、消費者ら約3500人が集まり、食と暮らしのいのちを守るためTPP国会決議の実現を訴えていた。実行委員会長の萬歳章全中会長の挨拶に続き、連帯挨拶、各界代表によるリレーメッセージ、参加した国会議員の政見発表挨拶が行われ、集会決議を採択。党に強く訴えるため開催集会後、参加者らは、国会の官庁街などをデモ行進した。



TPP決議の実現を求める国民集会
 主催 TPPから「食と暮らしのいのち」を守り「国会決議の実現」を求める実行委員会



①全国各地から日比谷野音に3500人が結集!
 ②霞ヶ関の官庁街をデモ行進する参加者

畜産経営の厳しさ訴える 14年度畜酪政策で要請^{連盟}



急激な円安による輸入飼料の高騰やスモール・素牛高が続いていることなど厳しい経営環境にある」として、生産基盤・経営安定対策の拡充・強化などの実現を強く要請した。小里政務官は、「配給料金の運用をしっかりとやっていきたい」となると心じた。要請の重点事項は次のとおり。

- ①畜産物等政策価格に
畜産酪農経営において再生産可能な適切な価格の決定を求める。
- ②TPP等国際貿易交渉の決定を求める。
- ③生産基盤・経営安定対策の拡充・強化
国内畜産酪農基盤の維持強化、及び経営安定を図るため、現行関連対策の拡充・強化を強く求める。
- ④震災・放射能汚染対策
被災地の復旧・復興支援は、引き続き万全な対策を講ずること。また、放射能汚染地域の除染等、迅速な実施に向けた支援対策を強化すること。
- ⑤消費拡大対策
国内畜産物の消費が低迷するなか、牛肉・豚肉・牛乳製品等畜産物の消費拡大策を講ずること。

主催は全国農協中央会、全国農業会議所、全漁連、全森連、生活クラブ事業連合生協連、大地を守る会、パルシステム生協連、中央酪農会議、主婦連合会の9団体で構成する同集会実行委員会。萬歳章全中会長は代表挨拶の中で、「2カ月前に代表者集会を開催の後、再び我々の思いを結集させなければならぬ緊迫した事態となっている。TPPは、食の安全・安心を脅かす」と述べた。

全日本開拓者連盟は12月13日、農水省に小里泰弘大臣政務官を訪ね、14委員長は、「畜産業は、求める大学教員の会呼びかけ人、中野和子・弁護士(TPPに反対する護士ネットワーク事務局長)が連帯挨拶。続いて「政府による情報開示が十分でない中、輸出国が重たい約束であり、必ずしも地理的条件に制約される農林水産分野の重要5品目などの聖域の確保を最優先し、それが確保できないと判断した場合、脱退も辞さないもの」と断行する」と明言した。

TPP交渉が越年 閣僚会合で妥結断念

12月7日からシンガポールで開催されていたTPP(環太平洋連携協定)閣僚会合は10日、年内の交渉妥結を断念し、交渉の継続を確認して閉幕した。同日、「この会合で、残された課題の大部分に

具体的に進展した分野や妥結の目標期限は明示されなかった。参加12カ国は、年内妥結を目指していたが、交渉が難航している分野で大きな進展はみられず、交渉は越年となった。21日の交渉分野の中で難航しているのは、「物品市場アクセス」、「知的財産(特許や著作権の保護、

今年4月に開催された国会の衆議院の農林水産委員会は、TPP協定交渉参加にあたり、①米、麦、牛肉・豚肉、乳製品、甘味資源作物などの農林水産物の重要品目について、引き続き再生産可能となるよう除外又は再協

本紙は無償で提供しています。
 ご希望の方はお知らせ下さい。

政府が水田農政転換決定

生産調整廃止・飼料米拡充

政府は11月26日、「農林水産業・地域の活力創造本部」を開き、経営所得安定対策の見直しと日本型直接支払制度(多面的機能支払)の創設などを決定した。主食用米の生産調整は5年後に廃止され、水田のフル活用を図るために飼料用米などへの転作の助成が拡充される。

米の直接支払交付金(現行は一律1万5000円/10㍎)は、14年産米から4年間、激変緩和の経過処置として7500円/10㍎に削減した上で、18年産米から廃止する。米価が標準的販売価格より低下した場合に補てんする米価変動補てん交付金は、14年産米から廃止。「米・畑作物の収

入減少影響緩和対策」は引き続き実施するが、15年産から、対象者を認定農業者、集落営農、認定就農者に限定する。中期にはすべての作物を対象とした収入保険を導入する。食料自給率の向上のため、水田活用の直接支払交付金により、飼料米、大豆など需要がある

作物への転作を進め、水田のフル活用を図る。飼料米・米粉用米の交付金(現行一律8万円/10㍎)は、数量払いを導入し、収量により最大10万5000円/10㍎に増額する。数量払い単価は167円/㍎で、農産物検査機関による数量の確認を受けていることが条件となる。ホールクロップサイレージ(WCS)用稲、加工用米、飼料作物などで、田、畑、草地に交付する。田の10㍎当たり交付単価は、前者が3000円、北海道は2300円、

後者が2400円(同一9200円)。中山間地域等直接支払、環境保全型農業直接支援は、引き続き実施される。米政策の見直しについて、定着状況をみながら5年後をめどに、行政による生産数量目標の配分に頼らずとも、国が策定する需給見通し等を踏まえつつ生産者や集荷業者・団体が中心となって円滑に需要に応じた生産が行える状況になるよう、行政・生産者団体・現場が一体となって取り組む量目標を765万トに設定し、各都道府県に配分

14年産の生産目標765万トン

主食 需要見通しは9万トン減

農水省はこのほど、14年産の主食用米の生産数量目標を765万トに設定し、各都道府県に配分

食料農業 知っておきたい話

第16回

のとあえず、TPP(環太平洋連携協定)の年内合意が決裂したのはよかった。関税分野だけでなく、知財(医薬品の特許など)、国有企業、投資家保護など、多くの分野で、米国の企業利益拡大のための各国のルール廃止や改変の押し付けに反発が強いというところだ。要するに、我々が主張してきたように、TPPの本質は、「対等な競争条件の名目の下に米企業が利益拡大を図るための障害となるルールを徹底的に廃止する、あるいは都合良く改変しようとする市場の強奪作戦である」ということが、さらに明白に示さ

「国会決議」を徹底して守れ

東京大学教授 鈴木宣弘氏

TPPの正念場

国会企業の要求と日本のアジア新興国に対する要求とはほとんど同じなのである。その際たるものが、米国の企業利益を損なったら、国民の命、健康、くらしを守る制度でも損害賠償で潰そうとするISD条項である。このような国家主権侵害でもあるISD条項には反対すると国会決議して

から土地の提供や施設、融資などで優遇されている企業はダメだということだ。」と指摘している。これは国有企業にとどまらない重大な問題である。ただ、それでも、最終的には着地点を見いださず、底して守り、譲れないものは譲れないと突っぱねて、交渉

を空中分解させる覚悟で臨むように、国民世論の「うねり」を高めていく必要がある。さらに問題なのは、日本は、12か国の交渉とは別に、日米2国間の交渉で、守ると決議した国益を、すでに次々と米国に差し出していることだ。BSEの輸入条件の緩和に始まり、軽自動車増税、医薬品の価格引き上げ、がん保険の取り扱い(全国の郵便局で米国の郵政公社の保険を販売する)など、次々と、日本側から自主的にやった形式にして、TPPとは関係ないと

BSE対策見直し

アイルランド産輸入再開

厚労省は12月2日、アイルランド産牛肉等について、食品安全委員会の科学的な評価結果に基づき、同日付けで輸入を再開すると発表した。

BSE(牛海綿状脳症)発生国の同国からの牛肉輸入が禁止されていたが、輸入再開のための輸出条件に係る協議および現地調査などを実施し、同政府の対日輸出条件を遵守する体制を確認できたことから、牛肉と

農地中間管理機構の活用により今後10年間で、全国の8割を担い手に集約。新規就農する農業者は、当初の需要見通しと同一数量で設定されたが、需要の減少により在庫量が少なくなったため、14年産の生産数量目標は、需要見通しを下回る設定となった。

岩手県下で講演・現地視察

全国開拓青年・女性研修会

東日本大震災被災地訪れる

全日本開拓者連盟、全開連、当協会の開拓中央三団体共催による13年度全国開拓青年・女性研修会が、11月19日から21日まで、岩手県下で開催された。全国から総勢90名の開拓青年・女性らが参加し、講演、現地視察研修などに熱心励んだ。

初日は、一関市の「ホテルサンルート一関」に集合し、開会。冒頭、太田哲雄開拓青年部長が挨拶を述べた。

藤原隆史氏の講演

講師は岩手高等学校



岡田剛造氏の叙勲を祝う会

（盛岡市）教諭の藤原隆史氏、演題は、「偏差値が低い進学校じゃない！奇跡の高校将棋部」。同氏は、71年盛岡市生まれ、94年より同校数学科教諭。教鞭をとるかたわら囲碁将棋部の監督・顧問を務め、全国高校将棋選手権で11年から団体部門三連覇、通算4度目の日本一に導いた。

講演に先立ち、昨年関東地区でテレビ放映された同校将棋部のドキュメンタリー番組（10/11年収録）が上映された。同校は私立の男子校で偏差値は普通のレベル、部員は総勢50人で大半が初心

者。同氏は、将棋は頭脳戦で偏差値が高い進学校が有利という常識をぶち破るため、部員のやる気を引き出させて積極的な将棋を指すことなど熱意を持って指導。部員たちの監督・顧問を務め、全国高校将棋選手権団体部門で準優勝、主に大学が競う学生将棋選手権にも出場し、高校唯一の団体ベスト4に入賞した。

意志あるところ、道はある

同氏は、将棋に限らず生徒個々の持っている能力を發揮させる指導について語り、キーワードを三つ挙げた。①「意志ある」ところに道はある。②「反省の上で成長あり」。③「偽りの果てに誇りな



①陸前高田駅前通り跡地にて。②高田松原の作業現場

て、前進していく精神) そのために、大会3週間前、三陸海岸の南に合宿して大会で使う戦法を固定し、実戦・研究を重ねていること、大会会場への交通などの便が良く宿を一年前から予約していること、チームワークをうまく築くよう自然・人間を知ることが、陸前高田駅や商店街、家

関係も大事であることを強調した。

参加者は、「職種は異なるが、子供や後継者のやる気や自主性を引き出すきっかけがつかめた」との感想を述べていた。

同氏の講演に対し、花平酪農協酪農婦人部会長の名須川千鶴子さんから謝辞が述べられた。

復興への道のりはまだ遠く

2日目は現地視察で、奥州市の「牛の博物館」と平泉町の中尊寺(世界文化遺産)を視察。牛の博物館は、世界唯一の牛博物館で、「牛と人間の共存を探り、生命・自然・人間を知る」がテーマ。牛の進化・品種・

体の特徴などの標本・資料の展示のほかに、人間の空き地のような風景。海に近い道の駅「高田松原」は大きな建物であったが、外壁だけ残り、中は何も無い状態。参加者は、同敷地内に設置されている追悼施設で被害者の冥福を祈った。被災から2年半が経過した今も、市内各地で数多くの重機による作業が続いていた。

参加者は復興が進んでない現状を目のあたりにして、まだまだ復興支援が必要であることを実感していた。

秋の叙勲で「旭日小綬章」を受章した前全開連会長岡田剛造氏の叙勲祝賀会が、12月12日、東京・三益堂ビル石垣記念ホールで開催された。主催は、同氏の叙勲を

祝う会(発起人代表櫻井徳一全開連会長)で、中央機関・団体、関係業界、開拓組織などから約70名が出席した。

はじめに櫻井発起人代表が挨拶に立ち、「氏は永年開拓にたずさわってきた結果に浴された」と述べ、地元の埼玉県東松山市松山開拓や県開拓組織、全国開拓組織において開拓事業の発展に尽力した功績を紹介した。

次いで来賓として、元農林水産大臣の山田正彦弁護士、農林中央金庫副理事長の宮園雅敬氏がそれぞれ祝辞を寄せ、氏の功績を称えた。

「この度の叙勲は、永年開拓にたずさわってきた結果に浴された」と述べ、地元の埼玉県東松山市松山開拓や県開拓組織、全国開拓組織において開拓事業の発展に尽力した功績を紹介した。

次いで来賓として、元農林水産大臣の山田正彦弁護士、農林中央金庫副理事長の宮園雅敬氏がそれぞれ祝辞を寄せ、氏の功績を称えた。

各地で枝肉共進会開催

開拓組織による共進会などが相次いで開催されている。

12月5日には、ゆうき青森農協枝肉勉強会が開催され、黒毛和種の部のチャンピオンを獲得した農事組合法人小川原湖農場の出品牛は、めす牛で31カ月齢、血統は父が「第1花園」、母の父が「安福久」。枝肉重量5.5kg、ロース芯面積10.6cm、ばらの厚さ10.1cm、BMS No.12、BC S No.3、格付がA5で肉張り、肉質ともに優れた

最優秀賞 新山鉄男 (ゆうき青森)

福岡県畜産農協枝肉共進会(交雑種) (12月2日・福岡食肉市場)

最優秀賞 野田貴文

ゆうき青森農協枝肉勉強会(12月5日・東京食肉市場)

黒毛和種の部

チャンピオン (小川原湖農場)

交雑種の部

チャンピオン 坂田弘志

肥後開拓農協枝肉共進会(交雑種) (12月5日・福岡食肉市場)

最優秀賞 林 芳弘

最優秀賞 新山鉄男 (ゆうき青森)

福岡県畜産農協枝肉共進会(交雑種) (12月2日・福岡食肉市場)

最優秀賞 野田貴文

ゆうき青森農協枝肉勉強会(12月5日・東京食肉市場)

黒毛和種の部

チャンピオン (小川原湖農場)

交雑種の部

チャンピオン 坂田弘志

肥後開拓農協枝肉共進会(交雑種) (12月5日・福岡食肉市場)

最優秀賞 林 芳弘

農研機構野菜茶業研究所

整枝と誘引作業を省力・軽労化 メロン新品种「フェーリア」

メロン栽培は、整枝、摘果作業に長時間、腰や膝を曲げた姿勢で作業をするため、作業の省力化・軽労化が求められていた。

農研機構野菜茶業研究所は、整枝・摘果作業を大幅に軽労化できる新品种「フェーリア」を育成し、13年3月に品種登録された。

メロンは栽培に手間がかかる果菜。「フェーリア」はイタリア語で「休暇」を意味し、休暇が取れるぐらい省力的な栽培ができることを意図し命名されたもの。

本種は短側枝性で発生する側枝の多くが20cm未満で伸長を停止するので、短い側枝は放任することができ、除去作業が5割程度短縮ができる。一般のメロン品種と異なり、両花性の代わりに雌花を付ける単性花型であるため、両花性で起きやすい自然着果が少な

く、余分な果実の摘果作業が軽減できる特性を持っている。

果実はやや縦型で、果皮は灰緑色でネットが密に発生し、果肉は淡緑色で食味に優れている。

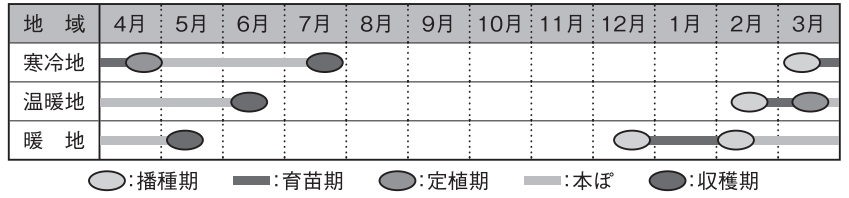
メロンの重要病害である、うどんこ病、つる割病に対する抵抗性がある。

栽培は地這い栽培に適し、九州から東北における半促成～早熟作型に適する(図)。高温・強光条件では、側枝が長く伸長してしまうので普通作型には適さない。

施肥・本ぼの準備、播種は、一般的なメロン品種と同様である。メロンの発芽適温は28～30℃であり、発芽を揃えるために保温が必要。育苗期間は9cmポットで30日程度。摘心は一般のメロンと同様に、本葉3～4枚程度残して摘心する。

定植は一般的なメロン品種と同様

図 「フェーリア」の適作型



で、株間60cm前後とする。斜め誘引法の場合、株間は45～50cm程度が適している。

定植後の温度管理は、一般的なメロン品種と同じ。

整枝は一般的な地這い栽培と同様に揃った2本の小づるを残し、その他の小づるを摘除。着果枝より下位節から発生する側枝は長く伸びることがあるので早めに摘除し、着果枝より上の側枝を放任する栽培方法ができる。一部の側枝が伸長することがあり、長く伸びた側枝のみを一度摘除。主枝は25節前後で摘心する。

果実は一般的なメロン品種に比べやや小さいので、第12～14節を目標に着果させる。1株4果穫りを基本とする。ネットの大割が起きやすいので果実の硬化期のかん水を控え、保温に努める。訪花昆虫による余剰果の発生を減少さ

せるため、交配期間の終了後はすみやかに搬出し、ハウスには防虫ネットを展開することが望ましい。

成熟日数は温暖地の6月上旬収穫で約53日前後。

本種は、つる枯病と菌核病に感染しやすいので、これらの病害の発生が多い産地では防除が必要であり、害虫の防除も通常通り行う必要がある。

種子は民間種苗会社から販売が開始されるまでの間、野菜茶業研究所と「原種苗提供契約」を締結の上、有償にて提供される。

申し込みの問い合わせは下記まで
農研機構野菜茶業研究所企画管理部
業務推進室企画チーム

TEL:050-3533-3810(直通)

記事内容の出典元は同研究所であり、詳しくは同研究所ホームページを参照のこと。

国内初 黒星病抵抗性品種 リンゴ新品种「あおり25」

(地独)青森県産業技術センターりんご研究所は、リンゴの新品种「あおり25」を育成し、13年3月に品種登録された。

本品種は「メロー」に「リパティ」を交配し育成した赤色品種で、加工適正が高く黒星病に真性抵抗性を持つ10

月下旬収穫の晩生種である。

主な特徴
本品種の開花日～落花日までの生育ステージは「ふじ」より3日程度早い。樹の生育特性は開張性で、細かい枝が多い。樹勢はやや弱め。早期落果、後期落果はともにみられない。

自家不和合性(S)遺伝子型はS₃S₅で、「ふじ」、「つがる」、「王林」など主要品種と和合性である。

果実は270g程度とやや小玉で、果色は紅色で縞が不明瞭に入る。果形は扁平形。果肉硬度は16ポンド程度、糖度は14%程度。酸度は0.6～0.7g/100ml。

酸味が強いが、果汁が多く、肉質はクリスプで食味が良い。つる割れ、心かび、みつ入り果の発生は少ない。つるさび果が発生する。摘果剤(NAC水和剤)はほとんど効果がない。

果肉は加熱調理にも崩れにくく、タ

ルトタンやシードルなどの酸味や風味を活かした調理や加工用途に適している。

貯蔵期間は普通冷蔵で3ヵ月程度、2月上旬頃より品質の低下がみられる。貯蔵障害は見受けられないが、油上がりがある。

黒星病に抵抗性があり、斑点落葉病にも強く、その他の病害虫に対しては通常の防除で良い。

本文の出典元は12年度東北農業青果情報であり、詳しくは同センターのホームページを参照のこと。

大玉で生産性の高い早生種 モモ新品种「福島11号」

福島県農業総合センター果樹研究所は、モモの新品种「モモ福島11号」を育成し、今年、品種登録を出願し出願に当たって品種登録名を一般公募されたがまだ公表されていない。

本種は母「川中島白桃」に父「モモ福島8号」を交配、育成した早生種。大果で日持ち性に優れる食味のよい白肉種である。

主な特徴

本種の開花期は「あかつき」と同時期で花粉をもつ。成熟日数(満開～収穫盛期)は約99日と「暁星」より3日程度長く、「あかつき」より5日程度短い。育成地(福島市飯坂町)では7月下旬から収穫できる。

果形は扁平形、果重は250～300g程度と早生種としては大果。着色は、はじめ縞状、「暁星」より色まわり

が遅い傾向にあるが、収穫期には全面着色する。肉質は中程度、繊維が少し混じるが、多汁で、糖度は12～14%と甘味が多く、食味が良い。白い果肉内に紅色素がみられる。蜜入りはほとんどみられない。日持ちは「日川白鳳」とほぼ同等。核割れは少なく、玉揃いは良い。栗粒からの果皮裂果がわずか見られることがある。収穫前の落果は少ない。

幹肥大は遅く、早生種では「日川白鳳」と同等。樹勢は中位で樹冠の拡がり「あかつき」よりやや小さい。

結実が安定していて「暁星」より大玉で生産性が高い。

詳しくは同センターのホームページを参照のこと。

食味が良く、大果で豊産性 ナシ新品种「恵水」

茨城県農業総合センター生物工学研究所は、ナシの新品种「恵水」を育成し、11年12月に品種登録された。

本種は「新雪」と「筑水」を交配し、実生から選抜したもの。食味が良く大果で豊産性の赤ナシ品種である。

主な特徴

果実の糖度は13%前後で酸味が少なく食味が良い。一果重は600g前後で大果である。着果量の目安は2～3果そうに1果とするのが良い。

収穫期は9月上旬～下旬で、「豊水」、「あきづき」と重なる。

収穫始期は満開後135～140日、収穫期間は3週間程度と幅がある。果実全体の緑色が退色し果面の70%以上が黄赤褐色になる状態(やや赤め)から果面全体が黄赤褐色なる状態(赤め)

までが収穫適期で食味のよい果実が収穫できる。

本種の開花期は「豊水」や「あきづき」より遅く授粉には「長十郎」、「新興」、「松島」、「豊水」が利用できる。「幸水」とは不和合性で授粉に利用できない。

みつ症の発生が認められるが、「豊水」と比べて発生率、発生程度は低い。弱勢樹への高接ぎは、みつ症の発症を助長する恐れがあるので避ける。

赤め以上になると過熟果となり食味が低下するので注意。収穫後の果実の日持ちは常温で2週程度。冷蔵貯蔵(温度2℃、湿度90%)では、収穫後120日程度の長期保存ができる。

詳しくは同センターのホームページを参照のこと。

農研機構東北農業研究センター 排水処理 省スペース・低コスト ハイブリッド伏流式人工湿地ろ過システムを開発

畜産農家や食品工場などからの汚水は生活排水よりも有機物濃度が高く、悪臭などの問題から、適切な処理をして河川などに放流しているが、安価で処理能力の高い施設の開発が望まれていた。

農研機構東北農業研究センターは、北海道大学や㈱たすくなどと共同し、汚濁成分濃度の高い有機性汚水を通年で浄化できる多段式のハイブリッド伏流式人工湿地ろ過システムを開発したので紹介する。

同システムは、酸素を多く供給する垂直流ろ床と酸素をあまり供給しない水平流ろ床の組み合わせで構成されている。垂直流ろ床には、重力を利用す

る自動サイフォンを設置し、高濃度の有機性汚水を浄化するため、垂直流ろ床の排水の一部を循環させるものもある。ろ過により生ずる目詰まりを防止するためにバイパス構造を強化し、人工軽石などの軽量浮遊資材をろ床表面に敷設。ろ床を通過することに汚水は次第に浄化される(写真)。処理水は冬期も含めて年間を通じて色もにおいも減少する。

バイパスや人工軽石を使わない砂利、砂などを利用するだけの標準的な伏流式人工湿地ろ過システムに比べ、半分からの1/5面積で設置ができ、同程度の処理能力を持つ従来の機械的処理法と比べ、初期費用が2/3程度、電

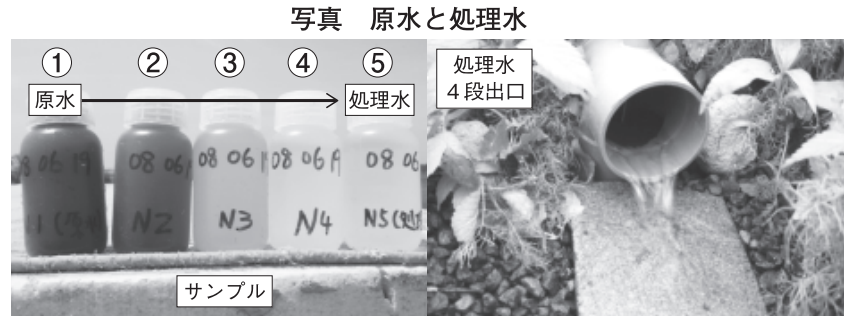


表 システム構成とコストの試算例(機械的処理法とのコスト比較)

汚水の種類と経営規模	規模		年平均気温 ℃	水質濃度		水量 m ³ /日	機械的処理法 ^{*1}			人工湿地ろ過システム ^{*2}		
	育成豚頭	搾乳牛頭		原水 BOD mg/L	処理水 BOD mg/L		水量	施工費用 万円	電気・薬品代 万円/年	段数	面積 m ²	施工費用 万円
豚舎汚水	800		15.8	5500	2.0	20.0	4,000	251	5	2012	3,230	14
豚舎汚水	2100		15.8	3750	20.0	31.5	4,800	248	4	2684	3,590	18
豚舎汚水	7000		16.3	6000	58.0	46.0	10,350	615	4	6212	6,850	26
パーラー排水		80	16.4	584	119.5	2.8	730	24	1	42	360	0.5
パーラー排水		375	14.6	4000	2.7	10.0	2,450	92	3	1100	1,860	4

※1：主に(財)畜産環境整備機構の家畜ふん尿処理施設・機械選定ガイドブック(汚水処理編)にある汚水浄化処理施設(活性汚泥処理法)の評価書個表を参考に記載。

※2：気温、水質、水量の条件からBODを基準にシステムを試算。施工費用は資材や地形などで変動する。

気使用料などの運転費用が1/20程度と安価である(表)。

現在、養豚、酪農、デンブン工場からの排水を初め、鶏卵洗浄排水、チーズ工場排水などを浄化する実用施設として検証が進み、北海道・東北・関東、東南アジアの14ヵ所で導入されている

(13年8月現在)。

同センターは、酪農、養豚などの生産者の農業経営改善と農村環境保全の両立に実用的な技術として広く普及が期待されるとしている。

詳しくは、同センターのホームページを参照のこと。

豚流行性下痢、7年ぶり発生

侵入防止のため予防と対策を

伝染病の豚流行性下痢が7年ぶりに沖縄、茨城で各1戸、発生が確認された。沖縄では母豚80頭規模の繁殖農場で発生し、4週間で約50%の哺乳豚が死亡。茨城では母豚150頭規模の繁殖肥

育一貫経営で発生し、発生後10日までに種豚2頭、母豚21頭、哺乳豚165頭で確認され、哺乳豚の約80%が死亡している。

豚流行性下痢は、届出伝染病で、ウ

ィルス感染豚の糞便を介して直接的、間接的に経口感染する。生産者は農場へのウィルス進入防止に努めることが求められる。

農研機構動物衛生研究所は、7年ぶりの豚流行性下痢の発生を受け、予防と対策を公表しているで紹介する。

症 状

本病に感染した豚は、水様性下痢、嘔吐、食欲不振、母豚の泌乳停止、哺乳豚の低体温などの症状をあらわす。

10日齢以下の哺乳豚では、激しい嘔吐、黄色の水様性下痢を起し、脱水状態となり削瘦する。10日齢以下の発病した哺乳豚は3～4日の経過で死亡することが多く、致死率は50%前後、時に100%に達する。

予防と対策

本病のウィルスは、豚の移動、人間の出入り、糞便に汚染された器具などにより伝播するので、ウィルスの伝播経路を断ち切る衛生管理を日頃から実施し、日常的に健康状態を観察し早期発見に努めることが重要である。

農場へウィルスを入れないために

農場に入る車両は消毒槽の通過および噴霧消毒の実施。とくに豚の運搬車両は荷台の消毒を徹底する。訪問者は農場専用の衣類と履物を着用する。新しく導入する豚は、農場から離れた場所または農場内の隔離された検疫豚舎で2～4週間健康状態の観察を行う。

繁殖分娩舎へウィルスを入れないために

本病は、哺乳豚に大きな被害をもたらすため、農場内では繁殖分娩舎への

ウィルスの侵入を防ぐことが重要。作業をする者は専従とするか、ワンウェイの作業を行う。繁殖分娩舎内では専用衣類と履物を着用する。豚舎は定期的に洗浄、消毒をする。

農場内にウィルスを蔓延させないために

農場内でのウィルスまん延防止のため、繁殖分娩豚舎と肥育豚舎で管理者と作業動線を完全に分ける。いったん発生した場合には早期診断により拡大の防止を図り、子豚の損失を食い止める。発病豚群を完全に隔離するか、可能ならば発病豚舎の全ての豚を搬出し、徹底的に消毒を行い、2週間の空舎期間を設ける。発病豚は保温し、自由に飲水させ、必要に応じて電解質の投与を行い、脱水症状を緩和させる。分娩前1～2週の豚は別に確保した豚舎に移動させ、ウィルスを伝播させないため衣類と履物は専用のものとし、作業者は専従か、ワンウェイとして飼養管理を行う。

ワクチンの接種

分娩前の妊娠豚に母豚用ワクチンを接種する。ワクチンは分娩後の乳汁中に抗体の分泌を誘導するもの。哺乳豚が抗体を含んだ乳を不断に飲むことで侵入したウィルスを中和し、感染量を低減させる。

ワクチンの使用に当たっては、母豚とは乳豚の飼養管理に加え、ウィルス侵入防止対策を始めとする衛生管理対策を確実に行うことが不可欠である。

詳しくは、同研究所のホームページを参照のこと。

組合数減るも利用日数増加

酪農ヘルパ利用実態速報

(一社)酪農ヘルパー全国協会は12月10日、「酪農ヘルパー利用実態(速報)」を公表した。

13年8月現在のヘルパー利用組合数は都府県が1組合減少し323組合(北海道90組合、都府県233組合)となった。

利用組合の活動範囲内の酪農家は1万7314戸(1利用組合当たり53.6戸)で、酪農家戸数(農水省畜産統計13年2月現在)に対するカバー率は90.6%(前年比△0.8%)となった。

利用組合参加戸数は1万3354戸(1利用組合当たり41.3戸)で、参加率77.1%(北海道:90.5%、都府県:69.3%)だった。

12年度の酪農ヘルパーの利用戸数は1万2092戸(北海道:5142戸、都府県:6950戸)で11年度に比べ442戸、3.5%減少(北海道:△202戸、△3.8%、都府県:△240戸、△3.3%)した。

1戸当たりの平均利用日数は20.17

日(北海道:20.44日、都府県:19.98日)で、11年度に比べて0.46日増加している(北海道:0.95日増加、都府県:0.11日増加)。1戸当たりの平均利用日数は年々増加傾向にあり、ここ5年間(07年度～12年度)で2.7日強増えている。

ヘルパー利用酪農家のうち65.2%(北海道:58.3%、都府県:70.4%)が12日以上(月当たり換算すると1日以上)を利用している。

病気や事故などによる発病時のヘルパーの利用者も年々増えて、12年度で1978人、11年度に比べ91人、4.8%増えている。

ヘルパー要員は2184人、専任ヘルパーは前年より20人増加し1175人、1利用組合当たりでは3.6人となっている。専任ヘルパーのうち女性は140人(北海道:60人、都府県:80人)。

12年度畜産物生産費 搾乳・肥育牛で前年より増加 飼料高騰などで所得減少

農水省はこのほど、「12年度畜産物生産費」を公表した。それによると、1頭当たり資本利子・地代全額算入生産費(以下、全算入生産費)は飼料費の増加などにより、乳用雄育成牛および交雑種育成牛以外の畜種で前年度に比べ増加した。所得は乳用種育成・肥育および交雑種肥育で昨年度に引き続きマイナス、肥育豚では前年度より大きく減少し、依然として畜産経営の厳しい状況がうかがえる。

搾乳牛

搾乳牛通年換算1頭当たり全算入生産費は73万7962円(前年度比1.2%増)で、生乳100kg当たり(乳脂肪分3.5%換算乳量)全算入生産費は8088円(同0.1%増)となった。飼料価格の上昇により飼料費が増加したことなどが影響し、全算入生産費が増加した。

1頭当たり粗収益は、乳価が上昇したことにより前年度比2.9%増の81万8932円。所得は18万3019円で、前年度に

比べ1万2415円増加した。

乳用雄肥育牛

乳用雄肥育牛1頭当たり全算入生産費は41万3893円(同1.8%増)となった。もと牛導入時期(主に11年2月~12年1月)におけるもと畜費が増加したことや配合飼料価格の上昇により飼料費が増加したことなどが影響し、全算入生産費が増加した。

1頭当たり粗収益は、市場価格が上昇したことにより前年度比1.4%増の31万2916円。所得はマイナス8万693円で、前年に比べ5525円減少した。

交雑種肥育牛

交雑種肥育牛1頭当たり全算入生産費は68万6562円(同5.8%増)となった。もと牛導入時期(主に10年9月~11年8月)におけるもと畜費が増加したことや配合飼料価格の上昇により飼料費が増加したことなどが影響し、全算入生産費が増加した。

新マルキン13年10月分 交雑種・乳用種で発動

農畜産業振興機構は、13年10月分の肉用牛肥育経営安定特別対策(新マルキン)事業の補てん金単価を公表した。前回と同様に交雑種、乳用種で補てんが行われる。

1頭当たり粗収益は、市場価格が上昇したことにより前年度比6.6%増の54万4658円。所得はマイナス9万6750円で、前年度に比べ423円減少した。

肉専用種子牛

肉専用種子牛1頭当たり全算入生産費は57万2276円(同0.6%増)となった。配合飼料価格の上昇により飼料費が増加したことなどが影響し、全算入生産費が増加した。

繁殖雌牛1頭当たり粗収益は、和子牛市場価格が上昇したことにより前年度比3.8%増の43万840円。所得は6万614円で、前年度に比べ1万1951円増加した。

肉専用種去勢若齢肥育牛

肉専用種去勢若齢肥育牛(肥育期間20ヵ月)1頭当たり全算入生産費は91

1頭当たりの補てん金単価は、交雑種が4万円、乳用種が4万1700円となった。

9月分と比べ、交雑種は飼料費などが増加したが、枝肉価格などの主産物価格が回復したため1万3500円減。乳用種も同様に枝肉単価が回復し粗収益が増加したため3800円減となった。

万59円(同2.6%増)となった。もと牛導入時期(主に10年8月~11年7月)におけるもと畜費が増加したことや配合飼料価格の上昇により飼料費が増加したことなどが影響し、全算入生産費が増加した。

1頭当たり粗収益は、市場価格が上昇したことにより前年度比6.0%増の84万6538円。所得は3871円で、前年に比べ2万3952円増加した。

肥育豚

肥育豚1頭当たり全算入生産費は3万2242円(同1.1%増)となった。飼料費が増加したことなどが影響し、全算入生産費が増加した。

1頭当たり粗収益は、枝肉価格が低下したことにより前年度比3.0%減の3万128円。所得は1003円で、前年度に比べ1327円減少した。

区 分	搾乳牛(1頭当たり)		乳用種(1頭当たり)				交雑種(1頭当たり)				肉専用種(1頭当たり)				肥育豚(1頭当たり)	
			育成牛		肥育牛		育成牛		肥育牛		子 牛		去勢若齢肥育牛			
	金額(円)	前年比(%)	金額(円)	前年比(%)	金額(円)	前年比(%)	金額(円)	前年比(%)	金額(円)	前年比(%)	金額(円)	前年比(%)	金額(円)	前年比(%)	金額(円)	前年比(%)
物 材 費	610,338	1.7	121,673	▲5.3	386,973	2.4	207,905	▲13.3	630,287	5.3	358,838	0.8	825,976	2.9	28,064	1.5
労 働 費	160,389	0.4	9,666	▲5.6	24,755	▲3.3	15,492	4	41,285	▲0.2	171,291	▲1.4	71,732	▲0.6	4,115	▲0.7
費 用 合 計	770,727	1.4	131,339	▲5.3	411,728	2.0	223,397	▲12.3	671,572	4.9	530,129	0	897,708	2.7	32,179	1.2
生 産 費 (副産物差額差引)	698,599	1.2	129,120	▲4.6	406,346	2.1	219,297	▲12.9	665,772	5.0	501,964	0.4	887,442	2.8	31,424	1.3
全算入生産費	737,962	1.2	131,723	▲4.7	413,893	1.8	222,270	▲13.4	686,562	5.8	572,276	0.6	910,059	2.6	32,242	1.1
粗 収 益	818,932	2.9	111,796	1.3	312,916	1.4	224,852	▲2.5	544,658	6.6	430,840	3.8	846,538	6.0	30,128	▲3.0
所 得	183,019	7.3	-12,043	-	-80,693	-	13,071	-	-96,750	-	60,614	24.6	3,871	-	1,003	▲57.0

注) 所得=粗収益-(生産費総額-(家族労働費+自己資本利子+自作地代))

全開連畜産技術センター試験結果 ビタミンA通期添加で増体確保 欠乏症を防ぐコントロール

肥育牛のビタミンAコントロールは、血中ビタミンAレベルを肥育中期(12~20ヵ月齢)に低く制限し、脂肪交雑(BMS)を高めつつビタミンA欠乏症を起こさないように血中ビタミンAを適正に保つ技術であり、現在まで、多くの研究がなされている。

全開連畜産技術センターは、過去の試験で「交雑種去勢牛の血中ビタミンA追跡試験I」として肥育中期(12~20ヵ月齢)にビタミンA無添加飼料を給与し、仕上げ期(21ヵ月~出荷まで)にはビタミンAを微量(200IU/kg)添加した配合飼料に切り替える体系での血中ビタミンA濃度追跡を行った。その結果、ビタミンA欠乏状態では、飼料の食い込みが予想以上に低下し、増体の著しい低下を招く牛がみられた。

今回、ビタミンA(200IU/kg)添加飼料を中期から出荷まで通期で使用し

た肥育体系で「交雑種去勢牛血中ビタミンA濃度追跡試験II」を行い、前回試験と成績を比較したので紹介する。

供試牛は交雑種去勢牛13頭で、試験期間は生後8ヵ月齢から25.5ヵ月齢の出荷までとした。全供試牛の血液採取と体重測定を2ヵ月に1度行い、ビタミンA、総コレステロール値、DGの値を追跡調査し、出荷成績の分析も行った。

その結果、試験IIでは、ビタミンA濃度が最も低下した時期が試験Iよりも2ヵ月間遅く、ビタミンA濃度の値も試験Iほど下がらなかった(図)。試験IIではビタミンA濃度が最も低下した19.8ヵ月でDGにおいても最低値であった。飼料摂取量はその間減少することもなく安定していた。

血中総コレステロール値は、飼料摂取量が増えると同時に値が上がり、ビ

タミンA濃度低下にともなう飼料摂取量の変化に連動して上昇、下降することがわかった。このことは、試験Iと試験IIで同様の傾向を示している。

これらのことから、試験Iよりも試験IIの方がビタミンA濃度の降下速度が遅く、ビタミンA濃度が危険域まで下がらなかったことで、飼料摂取量の低下を抑え、安定した増体量を確保できたと考えられた。このことは、試験IIの出荷が試験Iよりも平均で0.8ヵ月早くできたことにつながったと推測される(表)。

枝肉成績において、試験IIは、増体が試験Iを上回り、ばらつきが少なかった。肉質も試験IIが上回ったが、牛個体ごとにみるとビタミンA濃度との関連は見出せなかった。交雑種の場合、種雄牛や環境面での影響も受けるので、ビタミンAコントロールだけで、肉質を向上させることは難しいと考え

図 ビタミンA濃度とDGの関係

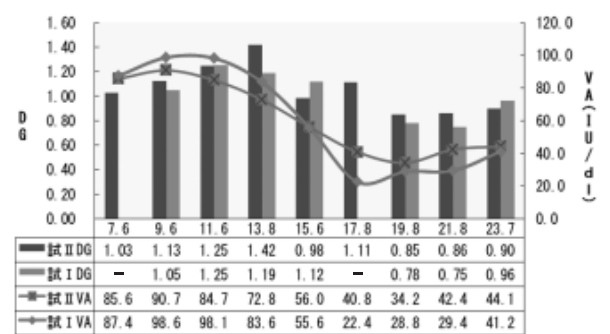


表 枝肉成績

	試験I (n=14)	試験II (n=13)
枝肉重量(kg)	503.3±42.5	537.2±39.4
格付3等級以上(%)	38.5	54.8
胸最長筋面積(cm ²)	49.2±7.9	44.8±3.7
ばらの厚さ(cm)	7.4±0.9	7.2±0.4
皮下脂肪の厚さ(cm)	3.0±0.8	2.9±0.9
BMS No	3.5±1.1	3.2±0.8
BCS No	3.8±0.4	4.0±0.0
締まり	2.3±0.4	2.6±0.7
出荷月齢	26.3±0.3	25.5±0.3

られる。今回の結果から、肥育中期にビタミンA(200IU/kg)添加飼料を給与した体系の方が、増体成績が良く個体間のばらつきが少ない傾向にあり、経済的に優れるということが推察される。

畜産物需給見通し

牛枝肉

出荷頭数・輸入量増も最需要期で堅調か

11月も全国の出荷頭数は前年実績を下回り、需要期入りで引き合いが活発化し、枝肉相場は全品種とも前月より上昇した。

これから、最需要期となるため、引き続き堅調な相場展開となることが予測される。

【乳去勢】11月の大阪市場乳去勢牛税込み平均枝肉単価は、B3は903円(前年同月比130%)、B2は869円(同132%)となった。前月に比べそれぞれ18円、42円上げた。

農畜産業振興機構は、12月の乳牛(雌含む)の全国出荷頭数を3万2000頭(同97%)と引き続き前年同月を下回ると見込んでいる。11月の牛肉の輸入量は3万7900t(同104%)、うち冷蔵品1万5600t(同97%)、冷凍品2万2300t(同110%)と見込んでいる。冷蔵品は前年同月をやや下回るが、冷凍品は前年同月が低水準であったことから、前年を上回ると予測している。

【F₁去勢】11月の東京市場F₁去勢牛税込み平均枝肉単価は、B3が1332円(前年同月比117%)、B2は1249円(同122%)となった。前月に比べそれぞれ30円、25円上げた。

農畜産業振興機構は、12月の交雑種の全国出荷頭数を2万4600頭(同113

%)と引き続き前年同月を上回ると予測している。

【和去勢】11月の東京市場和去勢牛税込み平均枝肉単価は、A4が2028円(前年同月比110%)、A3は1864円(同112%)となった。前月に比べそれぞれ75円、39円上げた。

農畜産業振興機構は、12月の和牛の全国出荷頭数を5万8800頭(同102%)と前年同月を上回ると予測している。

全体の出荷頭数は、前年同月が低水準であったことから、前年を2.3%上回ると予測している。

本格的な鍋物需要の到来と、年末年始用の手当で最需要期となり、全品種とも引き合いは強まることと予測される。出荷頭数は前年同月をやや上回るものの、相場は強含みになると見込まれる。ただ、最需要期向け手当が終われば相場を下げることもあるか。

このようなことから、向こう1ヵ月の相場は、大阪市場の乳去勢税込み平均枝肉単価は、B3が850~900円、B2は770~820円、東京市場の税込み平均枝肉単価は、F₁去勢B3が1300~1350円、B2は1200~1250円、和去勢A4が1900~2000円、A3は1800~1900円での展開が予測される。

11月の子牛取引状況 (単価: 頭、kg)

ブロック名	品種	頭数		重量		1頭当たり金額		単価/kg	
		当月	前月	当月	前月	当月	前月	当月	前月
北海道	乳去	275	313	285	290	139,802	128,646	491	444
	F ₁ 去	946	1,074	306	307	388,198	351,387	1,269	1,145
	和去	1,603	1,830	304	304	562,156	534,370	1,849	1,758
東北	乳去	1	-	106	-	33,600	-	317	-
	F ₁ 去	22	16	290	289	341,966	300,497	1,178	1,042
	和去	2,460	2,265	301	302	570,738	553,478	1,893	1,832
関東	乳去	16	29	265	283	123,047	121,220	464	428
	F ₁ 去	269	235	294	299	343,092	303,173	1,166	1,013
	和去	712	964	275	273	570,756	533,422	2,073	1,951
北陸	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F ₁ 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	-	-	-	-	-	-	-	-
東海	乳去	56	47	291	287	147,300	128,904	505	449
	F ₁ 去	95	87	303	300	320,681	294,048	1,058	981
	和去	426	225	267	259	551,077	524,920	2,066	2,025
近畿	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F ₁ 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	453	482	261	254	579,904	548,173	2,222	2,159
中四国	乳去	95	138	264	268	131,482	121,123	497	451
	F ₁ 去	244	231	282	276	325,444	303,858	1,156	1,099
	和去	561	923	208	226	538,998	505,079	2,592	2,235
九州・沖縄	乳去	28	44	288	294	143,887	133,087	499	452
	F ₁ 去	424	445	295	292	321,149	296,732	1,090	1,016
	和去	8,924	7,754	276	280	560,875	540,273	2,030	1,928
全国	乳去	471	571	281	285	138,464	126,814	493	445
	F ₁ 去	2,000	2,088	298	299	356,545	326,275	1,196	1,091
	和去	15,139	14,443	283	285	562,561	538,914	1,988	1,891

注) (独)農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計、当月は暫定値。価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。-は上場がなかったことを示す。関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。

品質によって価格差 コースの大きさがポイント

今年は冬が早く到来し、寒さが厳しくなってきた。鍋料理などの需要が活発になり、東京食肉市場の牛枝肉相場も一段の高まりをみせている。

買参人によると、食品表示偽装問題の影響から産地がはっきりした質の良い国産牛肉を求める消費者が増えており、昨年より牛肉の需要が高まっている。全品種とも引き合いが強まり、相場が上がっている。年末は和牛の出荷が多く交雑種の上場が減ることから、特に交雑種は相場が堅調である。

和牛や交雑種の同じ等級の枝肉でも品質によって、通常の時期より価

格差が大きくなる傾向にある。

年末は、すき焼きなどの鍋料理需要が増えるのでスライスものの消費が多くなる。特にカタコースが求められ、コース芯が大きく張り具合がしっかりした肉色の良いものは引き合いが強い。

コース芯が大きくコース芯周囲のカミ脂が少ない枝肉全体に肉付きの良いものは、単価の高いサーロインが多くとれるため、枝肉単価が高い。

上場されるものの中には、周囲にカミ脂が多く芯が小さいものやハート型に変形しているものがみられ、このような枝肉は単価が伸びない。買参人は、特にコース芯と芯の周囲がきちんと仕上がっているかを重視して購入している。

(全開連東日本支所東京事業所 酒井智丞)



豚枝肉

出荷頭数・輸入量増も鍋需要で引き合い強い

11月の東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、上物が487円(前年同月比122%)、中物は448円(同124%)となった。前月に比べそれぞれ14円、18円上げた。

出荷頭数、輸入量が予測より少なかったこと、需要が比較的好調なことが要因とみられる。例年にない堅調な相場で推移している。

農水省食肉鶏卵課によると、全国出荷頭数を12月は156万8000頭(同103%)、1月は146万1000頭(同101%)と前年同月を上回ると予測している。



素牛
スモール
の頭数減少傾向
変わらず

【乳素牛】11月の素牛価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は、乳去勢が13万8464円(前年同月比150%)、F₁去勢が35万6545円(同139%)となった。前月に比べ乳去勢は1万1650円、F₁去勢は3万2700円上げた。農家の導入意欲が強いものの出回り頭数が少なく、1段高となった。

今後も素牛の需要に供給が追いつかないことが見込まれ、両品種とも、枝肉相場が底堅いと予測されていることから、素牛相場はどちらも強含みで推移するか。

【スモール】11月の北海道主要市場1頭当たり税込み平均価格は、乳雄が3万5999円(前年同月比115%)、F₁雄が18万1901円(同145%)となった。前

農畜産業振興機構は、12月の輸入量を6万700t(同103%)、うち冷蔵品2万5000t(同112%)、冷凍品3万5700t(同97%)と予測している。冷凍品の輸入は、現地相場高、円安傾向などから、引き続き前年同月を下回ると予測している。

今冬は寒さが厳しく、鍋物需要が高まるものと期待される。出荷頭数、輸入量は増加の予測だが、国産豚肉の引き合いは強まり、堅調な相場で展開すると見込まれる。

このようなことから、向こう1ヵ月の東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、上物が490~520円、中物は450~480円での展開が予測される。

月に比べ乳雄は2303円下げ、F₁雄は6442円上げた。取引頭数は両品種とも減少しており、それぞれ前月比87%、81%、前年同月比99%、96%と、依然、品薄となっており、特にF₁雄の取引頭数が大きく減少している。

両品種とも需要がひっ迫しており、今後も、引き合いは強いと考えられる。

【和子牛】11月の和去勢価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は、56万2561円(前年同月比123%)で、前月に比べ2万3647円上げた。

全国的に素牛が少ない中、年末に向けて市場の需要最盛期入りか拍車をかけ、価格を押し上げた。今後も、子牛の急増が期待できない状況だが肥育農家の導入意欲に陰りは見られず、枝肉相場も堅調な推移が見込まれるため、向こう1ヵ月の市場相場は強気の展開が予測される。